



近年、学術界全体において国際的な発信力の強化がますます求められている。精神医学においても例外ではなく、国際誌への掲載や引用実績が研究者の評価指標として重視されている。実際、本学会でも *Psychiatry and Clinical Neurosciences* (PCN) および *Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports* (PCN Reports) を刊行しており、国際的な学術交流の進展とともに、これらの英文誌への投稿が増加している。英文誌への論文投稿を通じてわが国の研究成果が国際的に発信され、世界中の研究者との交流が活発化していることは喜ばしく、今後も英文誌のさらなる発展が期待される。

一方で、「精神神経学雑誌」をはじめとする和文誌も、国内の精神医学・精神医療において欠かせない役割を果たしている。和文誌は、単なる英語論文への足がかりや国内限定の情報源として捉えられるべきものではない。むしろ、日本語であるがゆえに果たせる固有の役割、日本語でなければ伝えられない知見が確かに存在する。

和文誌は、臨床現場と密接に結びついた実践知の共有にきわめて適した媒体である。日々の臨床のなかで蓄積される気づきや工夫は、必ずしも国際的な関心を集めることではないかもしれない。しかし、それらは日本の精神科医療の質を支えるうえで本質的な意味をもつ。医療者が母語で思考し、表現し、内省するプロセスを通じて言語化された知見は、同じく臨床に携わる他者の共感や実践的学びを喚起するのみならず、著者自身の臨床力の向上にも寄与する。論文化の過程で、日常臨床のなかで生まれた問い合わせし、議論として成立させる経験を蓄積することを通じて、より深い臨床的思考が育まれることが期待される。

わが国の文化的・社会的背景や法制度と密接に関連する精神医療や福祉の課題に関しては、和文による報告がより適切である場面も少なくない。和文誌の存在により、そのような複雑な文脈を織り込んだ発信が可能となる。地域連

携における実践的工夫、特定の制度の運用に関する実態調査、多職種協働のあり方に関する記述など、日本の現場に即した知見は、日本語という共通の言語基盤のもとでこそ、より深い意味をもつ。日本語で発信することにより、こうした知見が臨床や教育において直ちに活用される可能性も高まる。

さらに和文誌は、若手研究者や臨床家にとって学術的な発信の第一歩を踏み出すための教育的な場でもある。和文での査読を通じた支援や、実践知に対する敬意をもった評価のあり方は、今後ますます重要となるだろう。

こうした和文誌の多面的な意義については、先般神戸市で開催された第121回日本精神神経学会学術総会においても、精神神経学雑誌編集委員会主催のシンポジウムで多様な立場から意見が交わされた。和文誌を通じて、日常臨床に根ざした実践の報告や制度に関する調査研究が着実に蓄積されていること、また、そうした知見が他者の実践や研究への触発となっていることなどが紹介されるとともに、他の精神科関連学会における編集委員会の活動についても報告された。

和文誌は、臨床・教育・制度・文化といったわが国固有の背景に即した議論の場であり、現場の声をすくい上げ、可視化することで学術的対話を促進する役割を担っている。精神医学は文化や制度との相互作用のなかにある実践でもあるからこそ、日本語という言語を通じて語る意味は大きい。和文誌の意義を再確認することは、臨床・研究・教育のあらゆる現場において、日本の精神医学の歩みをどう記録し、どう未来へつなぐかという根本的な問いに向き合うことでもある。とりわけ、現場の課題が複雑化・多様化し、地域性や制度的制約を踏まえた議論が求められる現代においては、その必要性はいっそう高まっているといえるだろう。

藤井千代